

# 現代民話に見る他界観分析

## —「よみがえり」から見る他界と現世の境界—

佐崎 愛

キーワード 近現代、他界観、境界、「よみがえり」、『現代民話考』

### はじめに

日本人の他界観はこれまで多くの研究者によって宗教学、日本思想史、民俗学など様々な分野から、日本人の精神史の一環として研究が行われてきた。特に戦後の研究としては、例えば堀一郎は、日本人の古代の他界観を考察するため『万葉集』中の挽歌から他界の分析を行い、古代において山中他界が多い点を指摘した（堀 1953）。また、佐藤弘夫は他界の在り方における時代の流れを分かりやすく図示しながら示し、そこでは特に近現代（19世紀～）における他界と現世の関係について、「社会の世俗化と神仏の地位の低下は、この世の拡大とあの世の縮小として現出することになった」と述べている（佐藤 2008：217）。

さてここで他界の定義を確認すると、『日本民俗大辞典』の「他界観」という項目（鈴木 2000：28-29）では以下の通り定義されている。

人間の死後に靈魂が行く世界や神靈の住まいする世界についての観念。  
現世に対する他界で、あの世や異界ともいう。死後の他界は靈魂が肉体から分離して他界で存続するという霊肉二元観を基礎にしている。

また、『日本民俗宗教辞典』（松本 1998：367-369）では、死後の世界の他に、花鳥・仙女の舞う不老長生の理想郷としての他界もあるとしている。

以上の辞書的な意味から考察を行うと、他界とは「死後の世界」、「異界」<sup>1</sup>もしくは「理想郷」<sup>2</sup>というのがその定義に当たるようである。本稿では「他界」を、主に「死後世界」と言う意味として用いることとする。これは、今回他界以降を論じる際に扱う資料の特性上、また死に対するイメージがどのようなものか知ることを目的とするため、特に死に面した際に見たイメージを対象として選ぶからである。

さて、戦後の他界観研究として、いまだ強い影響力を持つのが柳田國男の山中他界の観念である。山中他界とは、日本人は死後、生前の暮らしを営んだ故郷や、子孫の生活を見守ることのできる山の頂に留まるという考え方であるが、この詳細は4章で述べることにする。柳田は日本人固有の信仰形態の典型として祖霊信仰の観念を探る中で、この山中他界を見出した。しかし現代の死のイメージを探る上で関係深い「お迎え現象」<sup>3</sup>や「臨死体験」<sup>4</sup>の中で見られるイメージからは、山中他界的な要素はほとんど存在しない。つまり、柳田のいう固有の信仰は、少なくとも現代においては見られにくいと考えられる。では、いま死後世界としての他界は具体的にどのように語られ、どのような特徴を持つものとして日本人にイメージされているのだろうか。また、民話を分類する中で、

- 
- 1 「異界」についての研究は、小松和彦が詳しい。小松は異界を相対的な観念と捉え、「人々の日常世界・日常生活の外側にあると考えられている世界・領域」とし、その上で異界を時間観念から二種類に分けている。一つは「個人個人の人生という時間軸上に見出される異界」として誕生以前の世界と死後世界であり、二つめは集団を規制している時間」として集団における過去や未来としての異界である（小松 2003：5-7）。小松の論でいう特に死後の世界としての異界を今回は「他界」として扱う。
  - 2 「理想郷」についての研究は、宮田登のユートピアの概念がそれに当たる。宮田によると理想郷とは、「もともと存在はしていないが、人間の想像力の及ぶところのもっとも理想的な世界についてのイメージ」と定義されている（宮田 2006b：2）。小松の論からいえばこれも異界に分類できるが、どちらの異界ともとることができる。念のためここでは「異界」と同様に死後世界としての「他界」と区別して取り扱いたい。
  - 3 「お迎え現象」は、諸岡らによると「終末期患者が自らの死に臨んで、すでに亡くなっている人物や、通常見ることでできない事物を見る類の体験」と定義される（諸岡、相澤、田代、岡部 2008：223）。また諸岡は現代民話とお迎え現象の比較も試みている（諸岡 2011）。
  - 4 「臨死体験」は、ベッカーによると「死ぬまぎわに見るヴィジョンや、一時的に死亡した後に蘇生し、語られる体験」と定義される（ベッカー 1992：13）。

大村（2012）が述べる様に死に際して見るイメージ<sup>5</sup>には、他界と現世の間にある「境界」<sup>6</sup>と言えるような情景が存在していたが（大村 2012:140-139, (69)-(70)）、これらは現世や他界に対してどのように表現されているのだろうか。今回はこれらの問題を探るために、特に他界での体験を語る「よみがえり」というモチーフを通して、現代における民話を探求する目的で1955年以降に松谷みよ子によって収集された民話集である『現代民話考』をそのテキストとして、分析を試みたい。なお、「よみがえり」のモチーフについては、2章の冒頭で説明することとする。

## 1. 松谷みよ子と現代民話

松谷みよ子『現代民話考』（以下民話考と表記）は全十二巻あり、1985年から1996年の間に出版された。民話考に掲載されている民話が収集され（松谷はこれを「民話を採訪する」と表現）始めたのは1955年以降であり、その民話資料の収集方法としては、一つが松谷自身の所属する日本民話の会発刊の『民話の手帖』における呼びかけやアンケートによって得られた話者やその紹介者、松谷自身の知人らへの聞き取りによるものであり、二つには雑誌や県史、民話を収集している著作など文献にまとめられたものからの抜粋による。これらの方法により集められた民話資料は、聞き取った話は方言をそのままに書き抜かれており、全てではないが分かる範囲で聞き取った話の年代、話者、話に出てくる場所や聞き取った場所を記載している。また既存の資料からの抜粋によるものも、話が聞き取られた形で極力残っている雑誌や著作などを主に資料として収集しており、年代や話者、聞き取り場所などがはっきりしているものを意図的に選んでいるようである。これら民話において詳細な情報を多く記載している理由として、その民話が本当に語られていたものであることを強く意識し

---

5 なお、大村の論の中では死に際した時に見るイメージを、「周囲の人にとっては幻覚・幻視であるかもしれないが、それを見た本人にとっては「事実である」」ことから中立的に「ヴィジョン vision」という語を用いている（2012: 148）。

6 他界と現世との境界に関して、大村（2012）は人生の終末期などに見る死者のヴィジョンにおいて、生者と死者の出会うところとして死者の世界でも生者の世界でもない「マージナルな場所」（大村 2012: 139）の存在を指摘している。

ているといえる。なお、松谷は民話を分類はしたものの詳細な検討・研究を行っていない。

さらに、民話考の収集目的を探るために、ここで松谷自身についても説明を加えたい。松谷みよ子（1926-2015）は東京生まれの作家であり、その著作には『龍の子太郎』（1960）（国際アンデルセン賞優良賞受賞）、『ふたりのイーダ』（1972）、『ちいさいモモちゃん』（1964）などをはじめとする多くの絵本・童話がある。また松谷がこのように物語と真剣に向き合いだしたきっかけは戦争体験であり、1941年第二次世界大戦が開戦すると、いつ死ぬかわからない恐怖と不安を童話にして綴り始めたという。二十代の頃に木下順二「民話管見」<sup>7）</sup>における「現代民話」という思想に大いに影響を受け、以後松谷は民話を収集し始める。松谷は、「民話といえば古いもの、遠いむかしから語り伝えられているものという概念はここでみごとに打ち破られました。そして伝承民話そのものも、かつては現代民話だったのだという視点を持つことができたのです。」と述べ、民話というものは絶えず生まれ続けるものであり、探そうと思えば現代にもあり得るとした。松谷はこの「現代民話」の概念を世に知らしめ、またこれら個々の民話から普遍性を探し出そうとした（松谷 2005：427-432）。また、松谷は民話を、昔から今までにその人にとって「あったること」と感じられる民間に広がる話であり、人がそこに在る限り日々生きて動いて生まれつつあるものと定義している。つまり、松谷は現代にも民話はありうると確信し、民話の収集にのぞんでいたのである。また民話の機能に関して次のようにも定義している。「語られる話は小さくても、その奥に民族の心があり、いや人類の、未知の部分をかいまみることができるのである」（松谷 1985-96Ⅴ：25）。これは、柳田以来の民間における実際の日本人の在り方が知りたいという点は変わらないものの、松谷はそこに仏教が入る以前の固有の信仰を求めなかった。松谷は地域に根付く「物語」には無意識に秘められた日本的な要素、もっと広義にいうならば現代人の共通の思考の在り方が何か隠れているのではないか、

---

7 木下順二 1952「民話管見」雑誌『文学』5月号

という発想に基づいて民話の収集を行っているのである。

さて、その後松谷は収集した民話を分類し、書籍の形で世に送り出した。具体的には11年かけて収集したこれらの民話を以下の12の要素に分け、それらを『現代民話考』において副題に添えて紹介している。分類は以下のとおりである。

- 1 卷「河童・天狗・神かくし」
- 2 卷「軍隊 徴兵検査 新兵の頃」
- 3 卷「偽汽車 船 自動車の笑いと怪談」
- 4 卷「夢の知らせ 火の玉 ぬけ出した魂」
- 5 卷「死後の知らせ あの世へ行った話」
- 6 卷「銃後 思想弾圧 空襲 沖縄戦」
- 7 卷「学校 笑いと怪談 学童疎開」
- 8 卷「ラジオ・テレビ局の笑いと怪談」
- 9 卷「木霊 蛇 木の精霊 戦争と木」
- 10 卷「狼・山犬 猫」
- 11 卷「狸 むじな」
- 12 卷「写真の怪 文明開化」

この中で、他界を語る「よみがえり」のモチーフは4巻、5巻、6巻、この中でも特に5巻を中心として見られた。では、抜き出した「よみがえり」のモチーフの中で、具体的にどのような他界観が見られたのかについて、2章で見ていきたい。

## 2. 『現代民話考』にみる他界

ここで「よみがえり」モチーフを、一度死んで（他界へ赴き）生き返った話、と定義する。<sup>8</sup>さて、1で確認した『現代民話考』の中から他界観を採り出すために、まずはこの他界を語る「よみがえり」のモチーフが見られる民話を取り出した。その結果、ここで見られた他界には、主に三つのタイプが存在した。これは民話考で見られる他界におけるイメージを、その情景・風景などから場所およびその移動手段の種類によって分類したものである。すなわち他界がどのような場所かということについて、極楽、地獄、山などに見られる、死後に行きつく先としての〈他界〉のイメージ、川、門、トンネルなどに見られる〈境界〉のイメージ、また上記二つ以外に現世と他界を行き来する移動手段としての〈乗り物〉のイメージである。

またその他、近代的な印象を受けるエスカレーターやチューブ、宇宙などといった近現代に出現したと思われる表現にも着目したい。では、これらについて以下で具体例を挙げつつ詳細に検討する。

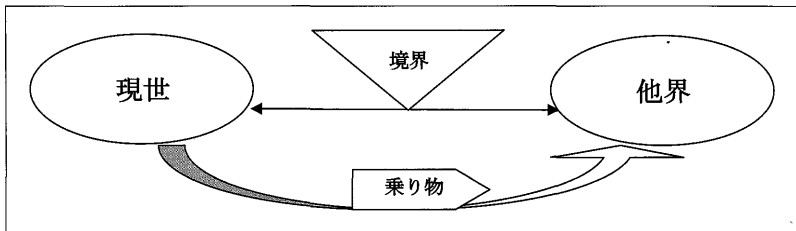


図1 現世と他界の境界

### 2-1. 〈他界〉のイメージ—極楽・地獄・山など—

死後に行きつく先としての〈他界〉イメージとは、文字通り死んだ先にあり、（死後の生活がある場合は）死後の生活を行う場という意味で、ここでは用い

8 「よみがえり」の定義について、『民俗小事典 死と葬送』における「蘇生譚」では「いったん死んだものが再びよみがえったという話」（真野 2005:15）、『縮刷版』日本宗教事典』における「黄泉路帰り」では「重態の時、人は生死の境をさまよひ、死の世界をのぞく」（赤田 1994: 631）と定義されている。これらの定義をまとめて上記の定義を設定した。

ることとする。このイメージに対して、なぜ頭に「死後に行きつく先としての」という表現を加えているかという、その後2-2でも触れるが、民話を語る者が現世と他界の「境界」のイメージに対しても、しばしば死後世界という意味合いで捉えている場合があるからである。そのためここでは、「他界」を広く境界も含んだ広義の死後世界とし、また〈他界〉は境界を含まない狭義の死後世界として扱うこととする。なお、現世と他界を行き来する移動手段としての〈乗り物〉のイメージでは、乗り物を死後世界と捉える表現は用いられていなかった。

さて、ここでは〈他界〉のイメージの例を具体的に見て行くこととする。これらに分類した話の例を挙げると、主に極楽・浄土や地獄、山・丘、暗闇・穴・奈落、お花畑・野原、寺、御殿・家、宇宙の概念がそれにあたり、特に柳田の山中他界はここに分類できる。なお、天国、黄泉の国や根の国、高天原なども設定はしたが、民話考において見られなかったため省いている。民話考で見られる以下の例は、それぞれ上記に挙げられている他界順に一例ずつ載せている。

#### 浄土・極楽

千葉県松戸市、昭和三十五年のこと。父が妹を自動車に乗せて買い物の帰り、橋を渡ろうとカーブに合わせてハンドルを切ったところ、そのまま車ごと川の中へ。救急車もすぐに来ず父は意識不明の重態、心臓は止まり脈はなくなり、全員が死の覚悟をしていた頃、父は夢を見ていたのだそう。この世のものとも思えぬほどきれいな花が咲き乱れる川原に立ち、川向いを見ると知っている人達が手まねきをして笑顔を浮かべている。あっと思ひ後ずさりをする、又同じ事が繰り返される。そのうちにモヤモヤと霧がかかり、阿弥陀如来がボーッと浮かびあがり、だんだんと姿が薄くなったと同時に白い壁が目の前に、それが病院の天井。事故から三日後に気がついたのだ。

(1985-96V : 101-102 回答者・秋谷節子(千葉県在住))

## 地獄

岩手県胆沢郡。大正十年頃の話。三途の川を渡ってしばらく行くと道は右と左に分かれていた。その次に通行札を渡すところがあり、おれは地獄行と書いた札をもらった。すぐ後に来た亡者は、極楽行である。すばやく札を取り替えて極楽行の右道に入ったが、何かに戻されて地獄行きの左道にやられる。極楽行に行こうとしても、どうしても行けない。苦しくなって叫んだら揺り動かされて目が覚めた。汗をびっしょりかいて疲れていたが、夢かと思うたら胸のつかえが取れたようだった。

(1985-96 V : 128 話者・知人。回答者・朝倉一二三(岩手県在住))

## 山・丘

青森県。死んだ人の魂は、恐山に集まるといわれ、病氣中に意識不明になった後蘇生した人の話の、恐山へ行ったら死んだ友だちが遊んでいるのをみた、といっているのを聞いたことがある。大畑町の斉藤というばさまが、一度死んでまた蘇生したのは、埋葬するとき、下駄を入れてやらなかったため、オヤマ(恐山)へ行ったらヌカリがあって、あるけなかったからだと話したという。その部落では、埋葬の時はぞうりではなくかならず下駄をいれてやるそうである。

(1985-96 V : 159-160 出典・北彰介編『青森県の怪談』(青森県児童文学研究会))

## 暗闇・穴・奈落

奈良県高市郡明日香村。昭和三十五年頃の話。私の友人のおばあさんの友達は、長く病気で寝たきりだったが、ある時、ついに目を覚まさなくなった。まわりの人は死んだものとばかり思っていたが、何時間か後、ふいと目をあけた。その人が語ったには、「気が付いたとき、真っ暗な所に坐っていた。あまり暗くて進もうにも進みようがない。どうすることなくその場でもがいていたら、上から忍者のような黒い人がおりて来て、お前はま



だここへ来るような者でない、といって自分をけっとばした。そして気が付いたらもとのように寝ていた」というのであった。その人はそれから病気がよくなったという。

(1985-96V : 39 話者・友人。回答者・松田有加 (京都府在住))

#### お花畑・野原

長野県小諸市。昭和二十五、六年頃、私が入院していた小諸療養所でのこと。六十歳すぎの男性患者が危篤状態になり、花園があったので行きたかったがやめた。そうしたら気がついた、とてもきれいだった、という。

(1985-96V : 67 回答者・宗務朝子 (東京都在住))

#### 寺

徳島県美馬郡貞光町。昭和八年頃、私の母親が鼻や口から血を出し意識不明になった。急いで医者連れて来て注射をうってもらった。しばらくして意識をとりもどした母は、今こんな所に行っていた、と話だした。そこはれんげ草がいちめんに咲いている広い野原で、野原の彼方にはいくつものお寺が建っていた。そして、どのお寺からもゴーン、ゴーンと鐘がなっており、なんともいえない気持ちだったそうである。

(1985-96V : 115-116 話者・平松昇。回答者・石崎敬子 (東京都在住))

#### 御殿・家

東京都。私の上司が昔バイトしてたんですよ。バイトしてたところが印刷所で、そこの職人さんの話なんですけども、その人がバイクが好きで、バイクに乗っていて、で、ぶちあたって、臨死体験した。ついたらお花畑にいて、それが胸のとこまで花なんだって。黄色くて向日葵みたいな大きな花で、それがずーっとつながってて、そこのところに一本の道があってね、そこをトコトコ歩いて行くと、向こうに掘立小屋が一軒立ってて、そこで亡くなったお父さんがね、来い来いっていつてるんだって。だからっ

て、一生懸命行ったんだけど、どうしても行けなくて、そのうち自分を呼ぶ声がするんで振りむいたら、生き返ってしまったとか。

(1985-96 V : 62-63 話者・岡野久美子。回答者・松谷みよ子 (東京都在住))

## 宇宙

福岡県小郡市。昭和五十一年二月のこと。急性劇症肝炎と急性腎不全が併発し、生と死のはざまへ引きずりこまれていた。私は闇の中へ入り自分の体からすうっと抜け出すを感じた。走りつづける救急車の担架に横たわる自分の姿が、そして頭をかかえてうずくまる夫の背が目の下にあった。病院についた私は急を聞いて、私の枕辺をかこんだ夫の上司や同僚の姿を見おろして漂い続けた。人の輪の中に、一歳四か月の長女美和、そして産後二か月をむかえたばかりの美恵の顔もあった。ジンと鼻の頭がしびれるような悲しみと悔恨の波がどうと渦巻くように私を押し包んだ。この時ほど、この子らの住む世界へ戻りたいと痛切に願ったことはないであろう。突然、私は宇宙の奥へと引きこまれてゆくのを覚えた。だんだん地球が遠のいてゆくのが見えた。まわりには人工衛星や汚れた衛星の破片がいくつも漂っている。もうこんなに遠くへ来たんだなあ、地球ってきれいなんだなあ、広い闇の中で、サファイヤのようにキラキラ輝いている、まるで宇宙のオアシスのようなところに私は住んでいたんだなあと思っていた。突然「どこへ行くの」と姿は見えないがなつかしい弟の音がする。だけどどうしてここに弟が。と、急にまわりが光で満ちあふれ、私は車イスでゆるやかに坂を下って行く自分に気付いたのだった。どれほどの時間がたったのだろうか、私はたしかによみがえったのだ。愛する母の、夫の、子供の住む世界へ帰って来ることができたのだ。生きているってこんなにもうれしいことだったんだ。あとからあとから大粒の熱い涙が頬をつたい、膝をぬからした。

(1985-96 V : 27-28 回答者・大石弘之 (佐賀県在住))

以上のことから、分かる特徴としては、〈他界〉のイメージでは、多くの場合気が付いたときすでにその世界にいる場合が多く、上記の「地獄」の例におけるような境界を越えてその先へ進むことで〈死後に行きつく先〉に到着するような表現はまれであった。

## 2-2. 〈境界〉のイメージ—川・門・トンネルなど—

〈境界〉としてのイメージは、川や門、トンネルなどの例のように、二点間の場所を繋ぐ役割を担うものが登場する場合のイメージである。民話考に出てきた具体的イメージとしては、川・河原・三途の川、暗闇・穴・奈落、雲の上、海、断崖、湖・池、門、トンネル、橋、駅がある。民話考で見られる例は以下の通りであり、それぞれ上記に挙げられている順に一例ずつ載せている。なお、〈他界〉のイメージと〈境界〉としてのイメージは明確に分ち難いものが多く、その判断が難しいことにも留保すべきである。しかしこれら二つイメージは分かちがたくはありものの、両者についてあえて分類を行うことで、現世と他界の距離の問題や、近現代の日本人が生と死の境界をどのように捉えているかを考察する上で有用である。また、近現代的イメージと思われるトンネルやエスカレーターなどの例も2-1、2-2、2-3にそれぞれ分類している。

### 川・河原・三途の川

山形県鶴岡市湯野浜海水浴場。昭和二十三年頃の夏のこと。友人の妹（十三、四歳）が湯野浜海水浴場で溺れ、仮死状態になった。人工呼吸の結果助かった。蘇生した本人の話では、「ひとりとほとほと白い砂、青い松の美しい道をあてどなくあるいて行った。すると目の前にきれいな川が流れていた。そこを渡ろうとして足を水に入れたとたん、うしろから大きな人の声がして呼び止められ、はっと目が覚めて、自分が助かった事を知った」という。

(1985-96 V : 43 回答者・梅木寿雄 (山形県在住))

## 暗闇・穴・奈落

福島県いわき市。私は昭和三十七年に脳卒中で倒れた。人に付き添われて病院に行き手術台の上に横たわった。病室に入る時、「よろしく願います」といったがあとのことなど覚えていない。私はひとりでプラ提灯をさげてとても静かな真っ暗な夜道を歩いていた。だれにも逢わなかったが少しの不安もなかった。歩きながら、これがあの世に行く道か、あの世がこんなに静かで落ち着いた所なら言ってもよいなと思った。また歩き続けたが、そのうち目が覚めた。

(1985-96 V : 34-35 回答者・高萩精玄 (福島県在住))

## 雲の上

大阪府八尾市。昭和四十二、三年頃の話。八尾市民病院で手術を受けて、全身麻酔がされる前に夢をみた。雲の上をいい気持ちで飛んでいたら、前方から天女が一人やって来た。とても美しかった。天女が近づいて来たら、途端に二人とも下へ落ちた。その時、目が覚めた。傍には妻がいた。

(1985-96 V : 31 話者・福田三郎。回答者・山村久美子 (大阪府在住))

## 海

栃木県黒磯市。叔母の法事に集まった人たちは、昼食のせいか全員食中毒にかかった。日ごろ体の弱い私を心配して人々は電話をかけてきた。だが私は、盛装した叔母が、広い海に見えるホテルの玄関から「あなた方は後に残っていて」と言いながら、その姿で海に入っていくのを見送る夢を見た。そして、私はだれよりも早く回復した。

(1985-96 V : 97 文・大平志乃。出典・「毎日新聞」昭和五十九年十月二日付。)

## 断崖

昭和十九年のこと。私が生死の境にいた時の夢の中の話です。岩の割れ

目のような断崖でした。みんなすいすいと飛び越すのに、どうしてもとべずべそをかいていました。

(1985-96 V : 95-96 回答者・立石巖 (東京都在住))

## 湖・池

六日町美佐島の産婦フクと云う人の場合である。この人は難産で息を引きとったのであるが、この人は其の時非常に咽喉がかわいて水が飲みたくなったので、近くの田の辺に清水が出ているので（この水は今もある）其処へ飲みに出掛けて行ったら、むやみにフクやフクやと家の人が呼ぶので飲まずに帰って来たと云う。

(1985-96 V : 98 文・渡邊行一「三条市での死生観」。出典・「民間伝承」十巻三号)

## 門

神奈川県江の島。祖父は私が中学一年の時に亡くなりましたが、その数年前から入退院をくり返していました。その時、生死の境に二、三度行き、美しい花畑に出たが、門を開けてもらえず引き返してきたと、言っていました。

(1985-96 V : 64 回答者・野口しげみ (埼玉県在住))

## トンネル

場所不明。私の友人の俳優・藤岡琢也の入院中の話である。医者はもちろん家族も死んだということを納得していた状態だった。自分の意識だけ不思議にはっきりしていて、医者が自分の死亡を宣告する声も明瞭に聞こえている。すると耳障りな「ブーンブーン、ザーザー、ガンガン」というような音が聞こえはじめ、同時に自分が長い暗いトンネルのような所を急速に移動していくのを感じる。そこからいきなり明るい所へフワッと出る。部屋の天上のあたりのところから自分の死骸を見ている。その周

りを医者や看護婦が囲み、家族のものが囲んでいる。するといやいや引っ張られ、暗いトンネルにはいて、気がついてみると自分のベッドにいた。

(1985-96V：28 出典・丹波哲郎著『死者の書』(中央アート出版))

## 橋

神奈川県小田原市。昭和四十七年頃のこと。肝臓の手術をした三十歳ぐらの女性から聞いた話。すーっと雲の上に運ばれて、なんだか知らないけれどふわふわふわってどこかを飛んで行くような感じがした。そのうちに、赤や紫や黄色の奇麗な花がいっぱい咲いているところへ降ろされた。みると向こうに川が流れており、たいこ橋があった。その橋を渡らないでいると、そのたいこ橋のところに手がたくさんできてきて招いた。その中に自分の親の顔がでてきて、こっちに来るなと手で合図する。親が来るなと合図をするので、やっぱり橋を渡らずにしようと思っているうちに目が覚めた。二度同じ思いをしたという。

(1985-96V：30-31 話者・井出そう。回答者・松谷みよ子(東京都在住))

## 駅

私の友人の親せきの人が、病気が悪くなって意識不明になった。駅のよな所へついた。車掌さんのような人が、キップを持っているかと、きいた。持っていなかった。すると、「あんたまだ早い、二か月したらまたおいで」と言って、キップをくれた。一度回復したが、二ヶ月後に死んだ、ということです。

(1985-96V：98-99 回答者・中本友子(奈良県在住))

以上により、〈境界〉のイメージは、他の〈他界〉や〈乗り物〉のイメージに比べて最も種類が多かった。これは、民話考から民話を選ぶ際に「よみがえり」モチーフを基準としたため、他界に行ききる前の〈境界〉の表現が多いこ

とが要因として考えられる。また、境界である川・河原・三途の川のイメージには、同じく〈境界〉としての橋や〈他界〉としてのお花畑・野原が伴うことが多いようである。

### 2-3. 〈乗り物〉のイメージ—舟・火の車・馬車など—

現世と他界を移動するための〈乗り物〉のイメージは、民話考内では主に5種あった。それぞれ、エスカレーター、舟、火の車、馬車、汽車、車である。エスカレーターは分類が難しかったが、「現世と他界を移動するもの」という点に着目し、こちらの項目に分類した。民話考で見られる以下の例は、それぞれ上記に挙げられている順に一例ずつ載せている。

#### エスカレーター

昭和三十八年のこと。担任していた生徒が水におぼれ、仮死状態になったときの話。加古川市を貫流している加古川でおぼれ、蘇生した本人からきかせてもらった。盛夏、水泳していて足の痙攣からおぼれ、全員で人工呼吸を繰り返しているとき、本人は「あの世」へ行くべく自動エスカレーターのようなものに乗る（大勢の人が乗っていた由）、針の穴のような灯火めがけて進んでいた。あたりは乳白色の花が一面に咲き乱れ、色のない世界を通っていたとき、後から、誰かわからないが、「オーイ、オーイ」と自分を呼ぶ声がする。振りむいたとき、「オッ、気が付いた、気が付いた」といわれた。人工呼吸をしていた人達の話では、突然ノドがゴロゴロなり出したので助かる、助けられると思い、一心に蘇生術を施したとか。

（1985-96 V：32-33 話者・生徒。回答者・玉井義明（兵庫県在住））

#### 舟

高知県高知市。昭和二十六年の夏、高知市の鏡川で水遊びをしていた私は、深みに入り、かなりの水を飲み、苦しみがきました。時間にして二十秒から三十秒ぐらいだと思いますが、一緒に遊びに来ていた親類の人

に助けられるまでの間のことです。目の前が、赤っぱい夕焼けのような色になり、宝船のような船がやって来て、乗っている七福神のような人が笑っている光景をみました。もちろん現実の現場にはその船はなく、なんだったのかと不思議に思っています。

(1985-96V : 94 回答者・清水康文 (高知県在住))

## 火の車

昭和二十年のこと。シベリア抑留中病気になり、火の車が来たので乗ると地獄に行きそうになった夢をみて、これでは駄目だと、其の車から下車して助かった。

(1985-96V : 128 回答者・菊池敬一 (岩手県在住))

## 馬車

それは、僕がまだ小学校の四年生の時のことです。重い肺炎にかかり数日にわたって高熱が続き特にその日は、知りあいの医者がつきっきりという状況でありました。夢うつつの僕の頭に無数の輝く星の尾を引いた銀色の馬車が現れました。四本の柱に支えられた屋根、手招きする御者、どこまでも続く星の帯、美しく光り輝いていました。僕がまさに乗り込もうという時、誰かが僕の名前を呼んで引き戻すのです。のちになって考えますと、或いはその瞬間が僕の生命の境い目（ママ）であったのかもしれませんが。それから三十数年が過ぎた今でも実に鮮烈な夢のかたちです。

(1985-96V : 149 回答者・八木信敬 (東京都在住))

## 汽車

新潟県古志郡山古志村。疎開した時のね、その小学五年生の子ですがね、それがこの村、兵平衛って家、そこへね疎開してきたんです。そして、そう私もみましたがね、顔色が悪くってね、男の子だったけど、元気のなさそうな子でしたねえ。それが、やっぱり寝ついてね、そして、あの死んだ



んです。そして、あの座敷に入れて戸をきちっと締めてね。ほて、こっちの茶の間の方で親類がみんな集まって、そして、お葬式の話をやったりしたそうです。そしたら、座敷でねゴトゴトと音がしたんです。みんなは、恐がってね、死んだのだからと思って、あれに戸を開けてみれ、これに戸を開けてみれ言うてね。そしてもう、そこ見るのを恐がっていたんだそうですけどね。そしたら、その、あるお婆さんがね。「そいじゃ、おれが開けてみよう」言うて、こう戸を開けてみたれりゃ、やっぱり生き返ってね。そしてやっぱり、動いたんだそうです。そして、「汽車の中でね、バナナがいつええあってね、それをもらって食べた」って、そう言ったそうですね。それから、その人も一か月位生きましたかね。で、とうとうまた死んで、あの、種芋原でお葬式を出しましたね。

(1985-96 V : 163 話者・坂牧ミト。出典・『山古志村史』(山古志村役場))

## 車

栃木県黒磯市。今年、二か月余の入院生活後の私は、畑や庭の手入れをした。その疲労と異常な暑さのせい、体のだるさ、眠さといったらなかった。家族に話しても、理解してはくれず、医者も「どこも悪くない」とビタミン剤をくれるだけ。あまりのつらさに私は「なぜこんな我慢をして生きていなければならぬか」と考えたりした。ところが敬老の日の明け方、数年前に亡くなった叔父叔母が、黒い車を二台も連ねて迎えに来たが、雨がひどいので乗車を断った夢を見た。目覚めると涼しい朝風が心地よく、私は「自分を大事に生きよう」と思い直した。

(1985-96 V : 146-147 文・大平志乃。出典・「毎日新聞」昭和五十九年十月二日付。)

以上のことからわかるのは、乗り物の中で火の車は常に地獄とセットで考えられる乗り物のようである。またここで近現代的な構成要素について考察したい。具体的には、宇宙、車、汽車、チューブ、エスカレーターのイメージであ

る。これらは近現代に出現したものであり、ここから近現代の文化が他界にも影響を及ぼしていることがわかる。またそれは現状、移動手段という形で表現されることが最も多い傾向にある。

### 3. 他界という「場」の構成要素分析

つぎに他界を物語分析における手法の一つである構成要素に着目して分析を行いたい。ここでは他界をある特定の「場」として試みるにより、その空間を構成するものを主に他界の情景・景色としての〈場所〉とそこに登場する人や動物など生き物としての〈登場人物〉<sup>9</sup>の二種類に分けて数量的に考察する。なお、今回は「場」を中心に他界の機能の考察のため、時間からの他界の考察は、今回見送ることとする。

まず、個別の構成要素を以下に表にして示しているので参照されたい。

表1 簡易な要素分類表

山・丘	3	仏・神	19
川・河原・三途の川	69	天女・天人	5
花畑・野原	82	精霊	2
寺	9	鬼・閻魔	15
門	7	死神	2
トンネル・チューブ	1	家族・親類	48
暗闇・穴・奈落	14	友人・知り合い	11
宇宙	1	知らない人	23
橋	13	死んだ自分を見る	4
雲の上	4	お坊さん	7
地獄	2		
浄土・極楽	7	舟	11
御殿	3	火の車	2
海	3	馬車	4
断崖	2	汽車	1
湖・池	4	車	1
駅	1	エスカレーター	2
あの世この世変わらない	1		

9 物語分析はこれまで多くの先行研究が存在する。物語論の始祖であるウラジーミル・プロップ (Propp, Vladimir Iakovlevich : Пропп, Владимир Яковлевич) は「昔話の形態学」(1928)において物語の機能をに着目した研究を行っているが、その際プロップは「登場人物」の役割に着目している。このことからヒントを得て、他界の機能を考えるにおいて、今回はその景観だけでなく登場人物にも着目した。

なお、「知らない人」についてのみ、ここで注釈を添える。知らない人とは、文字通り話者にとって全く知らない人物であり、また人の身体の一部ではあるものの、その人の全体が見えていない場合もこれに含む（例として、手だけが御殿の中から手招きしている（1986：30-31）、など）。

これらの多い要素上位五つを示すと、以下のとおりである。

1. お花畑・野原……………82
2. 川・河原・三途の川……………69
3. 家族・親類……………48
4. 知らない人……………23
5. 仏・神……………19

### 3－1. 場所的要素

情景を語る場所的な要素は、他界の重要な構成要素の一つである。場所的要素は、山・丘、花畑・野原、湖・池、寺、門、御殿・家、トンネル・チューブ、エスカレーター、宇宙、川・河原・三途の川、暗闇・穴・奈落、断崖、駅、海、橋、雲の上、地下、地獄、極楽、天国、乗り物（5）<sup>10</sup>、その他の25要素であった。なお、場所的要素の具体例は2で既に触れているため割愛する。

これらの要素うち、民話考でよく見られる場所的要素は以下のとおりである。

1. お花畑・野原……………82
2. 川・河原・三途の川……………69
3. 暗闇・穴……………14
4. 橋……………13
5. 乗り物（舟）……………11

---

10 乗り物；エレベーター、火の車、舟、馬車、汽車、車の5種。乗り物が登場する際、情景はほとんど記述されないため、今回は場所的要素に分類している。（例外：舟のみ川や海と共に記述される。）なお、この際火の車は地獄に連れて行くものと記載され、また馬車は数少ないながら2名が「銀の馬車」で空を駆けると表現されているのは興味深い。

以上をまとめると、現代のイメージを追うと、数量的には圧倒的に多くみられるのは「お花畑」のイメージと「川」のイメージであった。これは言い換えると、いまの日本人にとっての「他界」のイメージは従来の仏教的な浄土や極楽、地獄のイメージは少なく、むしろ自然に親しむような要素が語られていることがわかる。

### 3-2. 登場人物的要素

「他界」において、そこでどのような人物と出会うかは話を展開させる上で重要である。この登場人物は「他界」において、そこを訪れた人をあの世へ誘う働きや、反対に現世に帰そうとする働きを持っていることが多く、「他界」を語る上で省略できない要素である。民話考内における登場人物的要素は、仏・神、天女・天人、鬼・閻魔、死神、家族・親類、友人・知り合い、知らない人・人間の一部、お坊さん、自分、なし（登場人物なし）の10要素であった。なお、クロスチェックを行うために登場人物なしという項目も設け、また記載したが、2-1、2-2における「花畑・野原」や「トンネル」の例示は登場人物が自分以外いない、なしのパターンのため、下記に例示することを省略する。

#### 仏・神

昭和三十年頃、私の寺の寺同士の親戚の先住が病床にあった。その折、死んで行った所が、仏さん、金色の仏さんが大勢おられる所であったという。仮死状態からもどられての話である。

(1985-96 V : 101-103 話者・祖母。回答者・梅谷繁樹（京都府在住）)

#### 天女・天人

大阪府八尾市。昭和四十二、三年頃の話。八尾市民病院で手術を受けて、全身麻酔がきれる前に夢をみた。雲の上をいい気持ちで飛んでいたら、前方から天女が一人やって来た。とても美しかった。天女が付かづいて来たら、途端に二人とも下へ落ちた。その時、目が覚めた。傍には妻がいた。

(1985-96 V : 31 話者・福田三郎。回答者・山村久美子 (大阪府在住))

## 鬼・閻魔

群馬県桐生市。稲葉真さんが三十代位の若い頃だそうですが、ある時、風邪をこじらせて肺炎になって寝込みました。高熱を出して、うめき苦しんでいるうち、「あの世」にたどり着いたそうです。すると閻魔さんが来て「お前はまだ早すぎるから、帰れ」と言われて、はっと眼を開けたら家の中だったということです。それから、ある時、新宿を歩いていて、大宗寺の付け紐閻魔を見てから、信仰をするようになったそうです。足が悪くなって歩けなくなってからは私が代わりにお詣りして来ました。この稲葉さんは、昨年九十三歳で亡くなりました。

(1985-96 V : 122 話者・宇野まつ。回答者・望月新三郎 (東京都在住))

## 死神

東京都台東区上野。当年 (昭和五十七年) 八十三歳の当人から聞いた話。八年ぐらい病臥中でほとんど盲目だが意識は明瞭。「死神が迎えにきて、ついて行ったが今死ぬと、オレの恩給が来なくなって、家族が困るからと引き返した」ということが二回あったそうだ。

(1985-96 V : 143 回答者・戸塚廉 (静岡県在住))

## 家族

埼玉県。今から十七年前 (昭和四十年・註／松谷) に亡くなった祖母は、老衰で何回か死にそうな状態になり、その度に、川の向こう側で死んだおじいさんや、前夫が「オーイ、オーイ」と呼んでいるのに、背中をだれかがひっぱっていて、どうしても行けなかったと、話していました。最後に八十八歳で逝った時には、誰にもみとられず、夜眠りについたままの状態、二度と帰らぬ人となりました。

(1985-96 V : 45 回答者・倉田美子 (埼玉県在住))

## 友人・知り合い

新潟県古志郡山古志村。三日三晩、意識なかったらしいのだが、その友達が、そこへ来い来い言うけど、そこへ行がなんだよ。夢の中でね。「俺も連れて行ってくれ、連れて行ってくれ」って言っているんだけど、「まだ来んな、来んな」っての。それがまあ、そこへ行けば息が絶えたけど、行かなかったんだが、付き添いのお婆さんが言ったんだが、「それ友達のとこへ行っちゃえば、息引き取ったが、でそこへ行かないんだが、でおまえ助かった」って。

(1985-96 V : 135 話者・藤井巧。出典・『山古志村史』(山古志村役場))

## 知らない人

秋田県。昭和十九年か二十年頃の話。義母が結核で亡くなりました。お医者さんが「ご臨終です」と死んだことを告げて帰って行った。家族の者がいろいろ相談していると義母はむっくり起き上がり、「今、お花畑にいていたけど、誰かが来ちゃいけないよといって追い返された」という。死亡と言われて三時間後のことである。

(1985-96 V : 59 話者・田中。回答者・納所とい子(東京都在住))

## お坊さん

新潟県大野郡北谷村(現・勝山市)中野俣で十位の子供が死んだが、桶に入れる前に生き返ったことがあった。よく聞いて見ると、広いノッ原に坊様が二、三人いて、お前はまだ早いから帰えれといったので帰えって来たと云うた。

(1985-96 V : 113 文・石畝弘之「生徒死のイゲ」。出典・「民間伝承」十卷三号)

## 自分

昭和四十四年頃のこと。何度目かの危篤状態で病院にかつぎこまれ、個

室のベッドに寝かされていた。寝ている自分を空中にふんわりと浮かんで、頭の先の斜め上から見下ろしている私は、下の自分の額のまん中あたりから、くもの糸のように細い糸でつながっていた。肉体の私は、目をあけることはもちろん、小指の先すら動かすこともできず苦しみもなく、身も心も水の底のようにシンと静かだった。誰かがふっとその糸を横切ったら、おしまいになっていただろう。

(1985-96V：26-27 回答者・浜田晶子（神奈川県在住）)

これらのうち、民話考でよく見られる登場人物的要素は以下のとおりである。

1. 家族・親族……………48
2. 知らない人……………23
3. 仏・神……………19
4. 閻魔・鬼……………15
5. 友人・知り合い……………11

まとめると、他界において頻繁に登場する登場人物は、家族・親族が最も多いが、これは納得のできる結果である。その理由を推論すると、①死者になっても会いたいという気持ちが残っている、一方で②完全に死んだことを知っている（理解している）からであると考えられる。

### 3-3. 「場」としての他界の機能

では、場所的要素と登場人物的要素がどのように組み合わさって、他界という〈場〉を構成しているかを確認したい。ここでの〈場〉とは、死後世界をイメージするにあたり、「人々に想像される情景（場所的要素）+登場するもの（登場人物的要素）」の組み合わせと定義する。基本的には他界を語るほとんどの場合がこの組み合わせであり、これについては前述の場所や登場人物において示した具体例を参照されたい。

またこれらをより詳細に確認するために、次の頁に〈場〉におけるクロスチェックを行った。なお、一つの話に複数個要素が重なる場合（例：川＋お花畑＋家族）、それぞれにポイントを割り振った（例：川と家族、お花畑と家族の交わる場所にそれぞれ加点）。表は以下に示す。

表2 簡易クロスチェック表

場所 登場人物	山・丘	川・河原・三途の川	湖・池	花畑・野原	断崖	お寺	門	御殿・家	トンネル・チューブ
仏・神		6		4					
天女・天人		1		2					
鬼・閻魔		5		2		1			
死神									
家族・親族		24	3	27		4		1	
友人・知人	2	4	1	8		2	1	1	
不明人		24		18	2	3	1	4	1
お坊さん・お経		3		5		4			
死んだ自分		1		1					
キャラクターなし	2	11		22		3		3	1

エスカレーター	暗闇・穴・奈落	橋	極楽	地獄	雲の上	火の車	舟	馬車	車	汽車	その他
			4		1		3				3
		1									1
	1		3				1				4
	1										1
		6	1			1	4	1	1		3
		1									3
1	1	4		1	2		5	1			3
	1	2									1
										1	
1	10	4	3	3	1	1	1	1	1		4

その結果、場所的要素は複数重なる場合があり、最も多い例は①川＋お花畑、②川＋橋、③川＋お花畑＋橋の3つの組み合わせであり、それ以外はほとんど見られなかった。

また、死後のイメージに付随して、死後の世界に来るよう促されるたり（呼ばれる、せかされる、連れて行かれるなど）、現世に帰るよう促される（他界に来るなど怒られる、現世に帰れと諭されるなど）場合がある。以下に例を示す。なお、他界を構成する要素に下線を引いた。



佐賀県多久市多久町。私の妹がまだ学生のころ柿に当たって死ぬような思いをしました。その時「川の所に出た。向う側は、花がいっぱい咲いてきれいかった。橋を渡ろうとすると死んだばあちゃんがいる、『来たらいかん、来たらいかん』ちゅうて追いかえされた」と話していました。あの時、橋を渡っていたら、妹は亡くなっていただろう、と家族の者で話あったものです。

(1985-96 V : 89 回答者・今泉千代子)

千葉県旭市。昭和四十八年頃のこと。旭中央病院に入院していた友人が、腎不全で死の直前（昏睡状態）らしかったが、夢の中で川を渡った。対岸にきれいな花園がどこまでも続いていたが、ふと気付き目が覚めて死をまぬがれたという。

(1985-96 V : 80 回答者・永沢謹吾)

これらについても場合分けを行い、表にまとめた。以下の詳細クロスチェック表では、それぞれC = COME（他界に来い）、N = NEUTRAL（どちらの表記もなし）、D C = DON'T COME（現世に帰れ）の三分類でそれぞれの他界の持つ特性を分析している。

これらをまとめると、登場人物はほとんどの場合において「他界」に行くことを止めようとしている。しかしこの結果は、「よみがえり」というモチーフ自体の性格（死んだ後、再び蘇ることを前提としたモチーフ）のため「生き返る」、すなわち現世に帰ることが基準となっているため、登場人物によって傾向を見出だそうとすることは難しい。そのため、場所的要素と登場人物的要素の組み合わせにおける特徴をより詳細に捉えるために、他にもう一つ基準を設ける必要があると考えられる。それが、次に設定した明暗の基準である。

表3 詳細クロスチェック表

場所 登場人物	山・丘			川・河原・三途の川			湖・池			花畑・野原			断崖			お寺			門		
	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc
仏・神				1	2	3				1	1	3									
天使・天女				1						1	1										
閻魔・鬼						5						2						1			
死神																					
家族・親族				8	1	15	1		2	7	1	19				1		3			
友人・知人	2			4				1	4	1	3					1	1				1
不明人				9	4	11				12	6		1	1		2	1				1
お坊さん・お経				1		2				1	1	3				1	1	2			
死んだ自分					1					1											
キャラクターなし	2			11						22						3					
合計("なし"を除く)	2			24	9	36	1	3	26	6	36		1	1		2	4	8			2
全体合計	4			68			4		90				2			17					2

御殿・家			トンネル等			エスカレーター			暗闇・穴・奈落			宇宙			橋			極楽			地獄			海		
c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc
																	2	2							1	
														1				3								
					1				1																	
								1																		
														1	2		4			1					1	
1																	1									
2		2						1			1				3		1				1			1		
									1							1	1									

駅			霊の上			火の車			舟			馬車			車			汽車			その他		
c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc	c	n	dc
											1	2									1		2
																						1	
											1											1	3
									1			4	1			1					1		1
																						3	
1			2						3	1	1				1						3		
																							1
																			1				
				1		1			1			1			1								4
1			3			1		1	4	3	7	2			1	2		1			6	2	11
1			4			2			14			3			2			1					22

- \*いくつかの要素が重複する場合は、それぞれの場所のどちらにもポイントを振っている  
ex) 花畑と川のある風景で死んだ母に会う→花畑、川ともに家族・親類に1ポイントずつ
- \*山・丘の例のうち1件は、霊山信仰の例（恐山）である（特殊例外）
- \*その他の場所：海（2）、駅（1）、ホテル（1）、天国（1）など
- \*乗り物に関してのみ、“なし”を合計に加えてある
- \*c, n, dc = come, neutral, don't come

### 3-4. 他界の明暗

つぎに、場所的要素を明暗に分けてより詳細に検討することで、「他界」における情景がより理解しやすくなる。明暗に分けた理由としては、「他界」における描写には五感のうち特に視覚に訴える表現が多く、その中でも明るい暗いについて述べている記述が多かったため、重要な要素であると考え、このような分類項目を設けた。なお、特に明るい暗いの明記のないものは、その情景がはっきりと見えているか否かで明るい暗いを分類した。さて、以下では最も多かった場所的要素六つを明暗に分け、分類した。この際、最も多かった場所的要素はそれぞれ明るい方から、極楽、橋、お花畑・野原、お寺、川・河原・三途の川、暗闇・穴・奈落の順である。これについて、下記に場所を明暗に分けた上、そこに表れた登場人物、および他界に招くのか、現世に帰すのかについて表にまとめた。図は次のページに示した。

このことからまずわかることとして、おおよそ「他界」が暗くなるほど死後の世界に誘われる傾向が見てとれる。また、民話考内で見られる特徴として、「川・河原・三途の川」は「お花畑」などのイメージに比べて比較的暗いイメージで語られているが、「橋」とともに出現する際には明るい場所のイメージとして語られていることがこの図から読み取ることができる。

さて、民話考によって見られたこれらの要素から考察できる近現代の他界観の特徴として、①必ずしも極楽や浄土などは想像されず、また②チューブやエスカレーター、宇宙のような近現代になってから登場したものや概念についても、死に関連付けが行われ、少しずつ他界に取り入れられるようになっている。さらに、③死後に行きつく先としての〈他界〉と現世の間には〈境界〉としての場があり、またこれらは〈他界〉よりもイメージされやすい傾向にある。また④近現代におけるその代表的なイメージは、「お花畑」イメージや「川」イメージといえる。

このように、現代民話の特徴から具体的に近現代における他界を見てみたところ、他界観として柳田國男によって打ち立てられた山中他界の要素はほとん

ど見られなかった。それでは、山中他界と民話考中の「他界」にはどのような違いが存在するのであろうか。

#### 4. 柳田國男の山中他界と近現代の「他界」

はじめにでも触れたが、日本の死後観念の研究において現代においてももっとも影響を与えていると考えられるのが、この山中他界の観念である。まずは山中他界の定義から確認する。山中他界について柳田は「帰る山」(1945)において以下のように語られている。

無難に一生を経過した人々の行き処は、これよりももっと静かで清らかで、この世の常のざわめきから遠ざかり、かつ具体的にあのあたりと、おおよそ望み見られるような場所でなければならぬ。少なくともかつてはどのように期待せられていた形跡はなお存する。村の周囲のある秀でた峰の頂から、盆には盆路を刳り払い、または山川の流れの岸に魂を迎え、または川上の山から盆花を採つて来るなどの風習が、弘く各地の山村に今も行はれて居るなどもその一つである。霊山の崇拜は、日本では仏教の渡来よりも古い。仏教は寧ろこの固有の信仰を、宣伝の上に利用したかと思われる。

(下線は引用者による)

このことから、柳田は日本における固有の信仰において、死者の靈魂は極楽や地獄などの遠い観念的な世界に行くのではなく、子孫を見守ってられるような近くの山へ行くとしている。この際柳田は日本人の祖霊観をも絡めて説明しており、死者は弔いあげられると山にのぼって神となって子孫を見守り、また夏になると田の神として降りてきて子孫に豊作をもたらすものとして語られている。このような身近にある山中他界の信仰がより具体的な形で示され、また靈魂が留まりやすいと考えられたのが霊山信仰、また山岳信仰である。この

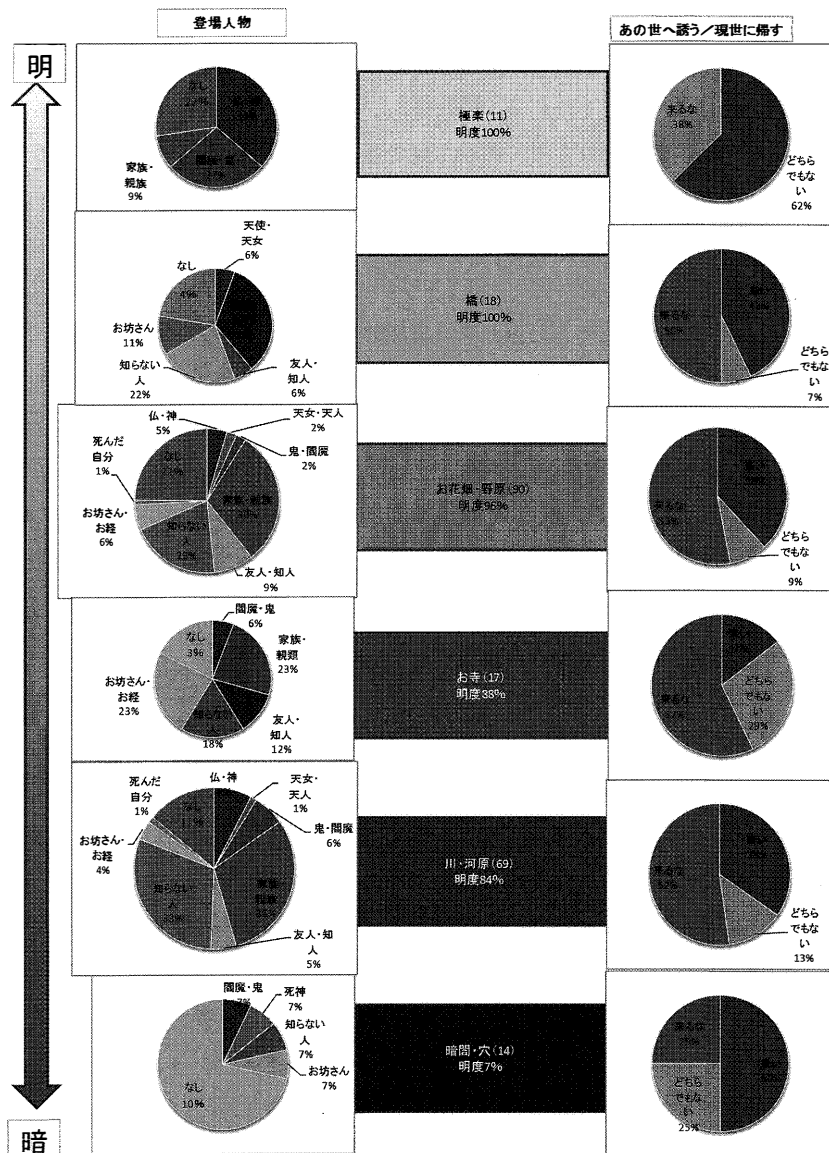


図2 他界を明暗にグラデーションで分類した図

\* その他を除く、二桁ある他界観について大まかに分類

\* 明度はおよその値

山中他界と平安期以降の仏教的な要素である阿弥陀信仰や浄土観念の流行と結び付いた結果、祖霊の宿る山をあの世とし、山中に極楽や地獄があるという霊山信仰へと結び付くとした。

しかし、民話考内では、上記の章で見てきたとおり、山中他界的要素はわずか3例しか見られなかった。そのうち2件は「霊山信仰」であり、残り1件は「山を越えた向こう側にお花畑や川があり、死者がいる」という形態の山中他界の信仰が描かれていた。<sup>11</sup>

しかし、3章を見る限りにおいて、現状他界は「お花畑」や「川」がよりイメージされやすいようである。ここでは山中他界、すなわち山のイメージは、死後の行き先である〈他界〉として扱われているが、一方で「川」のイメージは〈境界〉としての役割を担うものである。また「お花畑」のイメージは山中他界と同様〈他界〉のイメージではあるものの、〈境界〉である「川」のイメージと合わせて語られることの多いものである。これらのことから、人が死に際し死後の「他界」をイメージする際には、死後よりもむしろ〈境界〉の方をより多用する傾向にあるといえるだろう。

## おわりに

以上の点をまとめると、他界観を松谷みよ子『現代民話考』から考察を行うと、まず近現代の民話の中ではいまだ多くの研究者に根強く支持されている柳田國男の山中他界のイメージはおよそ3例のみしか認められない。したがって、民話の中で語られる「他界」のイメージは、死後に行きつく先の〈他界〉としての山中他界よりもむしろ〈境界〉としての「川」イメージの方がより多く見られる傾向にあるといえる。また、山中他界と同じく〈他界〉のイメージとして語られていたものの中で最も多かった「お花畑」イメージは、川などの〈境界〉イメージとともに語られる傾向にあり、「お花畑」はそれ自体が〈境界〉としてのイメージを含んでいるとは言えないものの、限りなく〈境界〉に近い

---

11 またそれぞれの民話の収集場所は、霊山信仰が青森県と山形県で見られ、後半の山中他界については福岡県であった。

イメージとして語られている。

また特に近現代の特徴として着目すべきであるのは、〈境界〉が〈他界〉に比べてより多種多様であるといえる点と、他界と現世を行き来する際に乗り物を用いる場合もあり、ここには近代的な乗り物が多くみられる点である。これらのことから考察できるのは、死後の世界や死者の行く先について人が思いを巡らせる時、死後は美しく奇麗なイメージ（すなわち「お花畑」など）で語られるものの、それが「極楽」や「地獄」など特定の価値観によって定義づけられたり、また救いや悟りの「場」であることはあまり求められない。むしろ生と死の境界付近かつ情景として「美しい場所」を設定する傾向にあると考えられる。

今後の課題としては、今回資料の特性上時代を「近現代」と幅広くとった。今後は現代の死生観や他界観を考察することを目的とし、より「現代」に適切な資料を選ぶ必要がある。また今回最も多かった「お花畑」と「川」のイメージがどのようなものに由来するものなのかについても、今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- 赤田光男 1994「黄泉路帰り」631頁 小野泰博・下出積興ほか〔編〕『縮刷版』日本宗教事典』弘文堂
- 池上良正 2011「身体の実践、人格の関係性としての「死者供養」」『国立歴史民俗博物館研究報告』第169集
- 伊藤幹治 1957「古代の葬制と他界観の構造」『国学院雑誌』60（7）
- 伊藤幹治 1980「他界観念」上田正昭〔編〕『講座日本の古代信仰』第1巻 学生社
- 稲田浩二・稲田和子 2010『新版 日本昔話ハンドブック』三省堂
- 上田敏 1979「研究考証」上田敏全集刊行会責任編集『定本上田敏全集』第9巻（研究考証、序跋、美術解説、小唄、聖教日課）教育出版センター
- 大村哲夫 2012「生者と死者をつなぐ〈絆〉—死者ヴィジョンの意味するもの—」印度学宗教学会 『論集』39号

- カール・ベッカー 1992『死の体験 臨死現象の探求』法藏館
- 楠正弘 1984『庶民信仰の世界 恐山信仰とオシラサン信仰』未来社
- 久野昭 1994『共同研究 日本人の他界観』国際日本文化研究センター
- 久野昭 1997『歴史文化ライブラリー 日本人の他界観』吉川弘文館
- 小松和彦〔編〕 2006『日本人の異界観』せりか書房
- 佐々木高弘 2006「異界の風景」：14-29 小松和彦〔編〕 2006 『日本人の異界観』せりか書房
- 佐藤弘夫 2008『死者のゆくえ』岩田書院
- 鈴木正崇 2000「他界観」：28-29 福田アジオ、新谷尚紀、湯川洋司、神田より子、中込睦子、渡邊欣雄〔編〕 『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館
- 大東俊一 2009『日本人の他界観の構造』彩流社
- 高田明典 2010『物語構造分析の理論と技法—CM・アニメ・コミック分析を例として—』大学教育出版
- 真野俊和 2005「蘇生譚」15頁 新谷尚紀、関沢まゆみ〔編〕 『民俗小事典 死と葬送』吉川弘文館
- 堀一郎 1953「万葉集にあらはれた葬制と他界観、靈魂観について」『万葉集全』第8巻 平凡社
- 松谷みよ子 1985～1996『現代民話考』全12巻、立風書房版／ちくま文庫版 2003～2004
- 松谷みよ子 2005『民話の世界』PHP研究所
- 松谷みよ子 Official Website <http://matsutani-miyoko.net/miyokosroom/publics/index/27/> (2017.01.04. 最終閲覧)
- 松本浩一 1998「他界観」：367-369 佐々木宏幹、宮田登、山折哲雄〔編〕 1998『日本民俗宗教辞典』東京堂出版
- 宮田登 2006a『宮田登 日本を語る7 靈魂と旅のフォークロア』吉川弘文館
- 宮田登 2006b『宮田登 日本を語る8 ユートピアとウマレキヨマリ』吉川弘文館



諸岡了介 2011「現代民話と〈お迎え〉体験」島根社会科懇話会『社会科研究』  
第32号：1-12

諸岡了介、相澤出、田代志門、岡部健 2008「現代の看取りにおける〈お迎え〉  
体験の語り—在宅ホスピス遺族アンケートから—」東京大学グローバルC  
OEプログラム『死生学研究』9：223-205

柳田國男 1945「先祖の話」1998『柳田國男全集』第15巻 筑摩書房

山折哲雄 1976, 改訂版2011『日本人の靈魂観 鎮魂と禁欲の精神史』河出書  
房新社

# The Concept of the Afterworld Analysis in the Modern Folktale

## —The Boundary between Afterworld and the secular world through the revival stories —

Ai Sazaki

By the main subject, it is intended to find concept on Japanese afterworld in modern for Miyoko Matsutani “*Gendaiminwako (the Modern Folktale)*”.

And, as a result of analysis of “*Gendaiminwako*”, element of the idea the next world in mountains by Kunio Yanagita was not seen as a characteristic of the concrete afterworld in modern.

In addition, I was able to classify these afterworld images in three mainly.

It is “border” image to exist between “afterworld” image, this world and the afterworld to assume Buddhists’ paradise and a mountain a point to arrive at after death each and “vehicle” image to take a dead person from this world to the death with.

A kind in particular is abundant, and the “border” image tends to be imaged a lot again in this.

The representative is the image of “the river”, and the image of “the flower field” often accompanies it.

In addition, there were many things which appeared in modern times, and tended to be used the afterworld in “vehicle” to take it to.